SPYシネマズ～憧れの先輩にハニートラップ仕掛けられたけど好きなのでこのまま騙されます～

那珂テクス

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

横浜市内の男子高校生、白笹庵（しらささ　いおり）は、異精と呼ばれる化物を「映画撮影」という体で退治するアルバイトをしている。

ある晩、依頼通りに異精を討伐しようとしていた庵は、とある少女によって妨害を受けてしまう。驚くことに、彼女は同じ高校に通う憧れの先輩、二階堂奈津（にかいどうなつ）その人だった――。

小劇場で巻き起こる裏切りのサーカス、ここに開園。

目次

特異撮影班篇
第1話　特異撮影 ―― 1
第2話　ハニートラップ ―― 12
第3話　罪と罰 ―― 21
第4話　墓地と千貌と大鎌と ―― 27

特異撮影班篇

第1話　特異撮影

7月初旬の夜なのに、うだるような暑さの横浜赤レンガパーク。

俺――白笹庵（しらささいおり）と、その相棒の玉川（たまがわ）クリストファーは、とある映画撮影の準備をしていた。周囲にいるのは甘い雰囲気を垂れ流すカップルばかりで、その大半が物珍しそうにこちらの様子を窺っている。

……まあ、ジロジロ見られるのはいつものことだ。今さら気にしたって仕方ない。

衆目を無視しつつカメラをセッティングしていると、地毛の金髪を弄りながらボーッと海を眺めていた相棒が、急に話を振ってきた。

「なぁイオ。今日俺の代わりに出演してくんね？」

「……嫌だよ。お前先週も撮影だったじゃねえか」

「まぁ聞けって。今日の主役は半魚人なんだろ？　ちょっと試してみたい画角があるんだよ」

そう言ってカメラを奪い取る玉川。俺が進めていた設定をわざわざ初期化するあたり、仕事をサボりたいが故の方便ではないらしい。

だが、その行為には何の意味もない。何故なら――

「画角なんて気にしてどうすんだよ。うちの映画はガワだけなのに」

そう指摘してやっても、我が相棒は「知ってる」と返すだけで、頑なにカメラを手離そうとしない。こうなると何を言っても無駄だろう。

どこから呼び出したのかも分からない設定画面を慣れた手つきで操作し、喜々として三脚の設置場所を探し始めた玉川を見送りつつ、俺は『ゴッドシネマ白笹』のロゴが入った腕章を取り付けた。

――そう。この腕章も、ごついカメラも、たいそうな照明も、所詮は映画撮影という体裁を整える為のハリボテに過ぎない。

『半魚人の掃討』という本来の目的を達成するため、俺は眼前に広がる東京湾を睨みつつ、腰に差していたカランビット・ナイフを抜き取った。

「よっしゃ！　始めるぜ！」

カメラの設置場所をようやく決めた玉川が、気合十分に指笛を鳴らす。

その直後、周囲にいた人間が１人残らず催眠状態に陥った。

虚ろな目で微動だにしなくなった彼らに対して、玉川は心底愉快そうに命じる。

『はーいみなさん。これから映画撮影をしますからねー。今から起きることは全て演出ですからねー。あと危ないので近寄っちゃいけませんよー』

そう言い終えるや否や、催眠下の人間がふらふらと海岸から離れていく。このあまりにも異様な光景を作り出した張本人は、まるで何事も無かったかのようにカメラを回し始めた。

本当に何なんだ、こいつ。いくらなんでも滅茶苦茶すぎる。

まず、他人を意のままに操るなんて能力自体が馬鹿げている。しかもこの玉川クリストファーという男は、周囲１００ｍという条件下であれば、いくらでも他人を操ってしまうのだ。

初めてこいつと出会った時は１０００人弱の虚無顔人間に取り囲まれたしな。危うく漏らしかけた。

おまけにこいつの催眠術は、本来予備動作を必要としない。先ほどは調子に乗って指笛なんかを鳴らしていたが、実際はその気になっただけで周囲の人間が丸ごと操り人形と化すわけだ。チートか？

相変わらず得体が知れない相棒にドン引いていると、目の前の海面がぶくぶくと泡立ち始めた。どうやら主役のご登場らしい。

【ゴァァァァァァァァァァァァァァァ!!】

勢いよく海面を飛び出して石畳に着地してきたのは、筋骨隆々のヒト型生命体。ただしその体躯は２ｍを優に超え、肌は暗緑色、首にはエラ、背面には魚の鱗と立派な背ビ

レがついている。
　うん。どこからどう見ても半魚人だ。分かりやすい見た目で助かる。
「……０オア１Ｄ６ってところか」
　見た目がとあるＴＲＰＧの敵キャラそっくりだったのでつい独り言ちると、遠くでカメラを構えていた玉川が反応した。
「イオにまだ減るようなＳＡＮ値が残ってるとはびっくりだわ！」
「全くな。お前のおかげでとっくに０だと思ってた」
「お？　喧嘩か？」
　そんな軽口を叩きあっていると、牙を剥き出しにした半魚人が唸り声を上げて突進してきた。鈍重そうな見た目に似つかわしくない素早さで、１０ｍほどの距離を一瞬で詰めてくる。
　鋭いかぎ爪が左右から同時に振るわれた瞬間――俺は奴の懐に入り込み、左手で筋肉質な右手首を抑えつつ、右手に握ったカランビットを首筋に引っ掛けた。
　そのまま突進の勢いを利用して奴の体を持ち上げ――バンッ!!
　石畳に思いきり叩きつけてやる。間髪入れずに奴の左手首を右足で抑えつけ、頸動脈を掻き切る――つもりだったが、噛みつかれそうになったのでひとまず距離を取った。
　うん。こいつはまだ戦いやすいな。

図体はデカいが肉体の可動域が人間並みだし、恐らく内部の構造も大差ないだろう。注意点は牙、爪、硬い筋肉くらいだろうか。とはいえ、爪も牙も避けづらい形状ではないし、筋肉だって全く切れないわけじゃない。今だって傷口から真っ黒い血が滲んでいるし、もう少し力を籠めれば深く抉れるはずだ。

背後から聞こえてきた軽薄な口笛を無視しつつ、俺はカランビットを構え直す。

「来いよ、さかなクン。少し遊んでやる」

◇

それからの展開はあっけないものだった。

かぎ爪や噛みつきを避けてはカウンターで腱を切り、距離を取っては突進されを繰り返していると、あの半魚人が赤レンガ倉庫の外壁に激突したのだ。そのまま仰向けに倒れてピクリともしなくなったので、俺は若干の哀れみを抱きつつ奴を介錯した。

成り行きを見守っていたカメラマンが「こんなB級以下の幕引きあるかよぉ！」とかなんとか宣っていたが、思い切り無視して撮影機材を押しつけてやった。恨めしそうな顔で見られたが、こっちは半魚人との戦闘をワンオペでこなしたのだ。文句を言われる筋合いはないだろう。

そんなこんなで地下鉄に乗り、雇用先がある伊勢佐木町に戻ってくる頃には、時刻は午後11時になっていた。

「おっもい疲れた……何で俺がこんな目に……」
後ろを歩いていた玉川が苦しそうに呻く。振り返ってみると、奴は撮影機材を心底辛そうに抱きかかえていた。助けを乞うような目を向けられるが、それに対して俺はただ肩をすくめる。
「裏方が機材運搬をするのは当然だろ、カメラマンの玉川クン」
「へいへい分かったよ、俺が悪うございました！　次はお前に押しつけてやるからなチクショウ」
「それはつまりお前1人で出演するということでよろしいか？」
「鬼か！」
くだらないやり取りをしつつ、2人揃ってとある路地で立ち止まる。
――『ゴッドシネマ白笹』。
このセンスのかけらもない名前。そして聞いたこともないC級映画のポスターに彩られた古臭いミニシアターが、俺たちのバイト先だ。とはいえ、その主な業務内容は一般的な映画館とは大きく異なる。1日に1人客が入れば御の字のゴッドシネマ（笑）では、上映の売上が万年大赤字なのだ。
では、どのようにして稼ぐのか。
その答えこそが、先ほどまで実施していた『特異撮影』という業務だ。

ゴッドシネマ白笹には、人間でも動物でもない未知の怪異――俺たちは異精（いせい）と呼ぶ――に悩まされた依頼人が、様々な依頼を持ち込んでくる。俺たち『撮影班』――現場で異精に対応する班のことだ――はその依頼を受注し、映画撮影という体で異精の安全評価・封印・討伐といった業務をこなす。何故そのような体裁を整えるのかというと、近頃は一般人に業務を目撃される機会が増えすぎたせいだ。

隠し通すのが無理なら、最初から明け透けにすればいい。

「これは映画撮影だ」という暗示をかけることで、本来は目撃者を発狂させかねない体験を、ちょっとした良い思い出に留める事ができる。

我らが劇場の支配人は、そういった理由でゴッドシネマ白笹を開業したのだと言う。

ちなみに昔、「それなら別に映画館にしなくても、映画スタジオにすれば良かったんじゃないですか」と尋ねたところ、「劇場経営が長年の夢だったから」という身も蓋もない答えが返ってきた。結局のところ、劇場経営は支配人のエゴということだ。

劇場さえ無ければ、うちの稼ぎも随分マシになるんだけどな……。

表に出された『本日営業終了』の看板を横目に、エントランスのすぐ先にある階段を上る。そうして2階に辿り着くと、受付に座るセミロングの若い女性が見えた。

全くこちらに気づかない様子から察するに、いつも通り手元で流れる映画に釘づけらしい。

「今日は何観てるの、美空さん」
「……ふぇ？　お、おかえり庵くん、玉川くん！　お勤めご苦労様」
分かりやすく慌てた様子で顔を上げたのは、当映画館の支配人、白笹美空（しらささみそら）その人だ。ヘアバンドでおでこを丸出しにしていて、まん丸のガリ勉眼鏡の下から人懐っこそうな瞳が覗いている。
ちなみにこの人、同じ苗字だが血縁関係があるわけではない。美空さんは俺の養親で、俺は美空さんの養子なのだ。
とはいえ、知り合ったのはつい3年前のことだし、年齢も１０しか違わない。戸籍上は立派な親子関係だが、感覚的には面倒を見てくれる近所のお姉さんという方が近い。
だからというわけではないが、俺がこの人の無防備なショートパンツ＆タンクトップ姿を海馬に焼き付けるのも、年頃の男子高校生としては正常な反応だろう。そうに違いない。
「営業終了後もたまに依頼人が来るんだから、その格好はどうかと思うよ」
何となく他の男に見られるのも癪だしね！
内心でえらく不純なお気持ちを抱えていると、美空さんは恥ずかしそうに頬を掻いた。
「えっへへ、ごめんね……ところで今回の依頼はどうだった？」

「楽だったよ。全体的にちょっと大きいだけの人間って感じ」
「俺の知ってる人間と違う」
げんなりとした様子で割り込んでくる玉川。その体に過積載された機材を引き?がしつつ、俺は軽口を叩く。
「動脈切って死ぬんだから似たようなもんだろ」
「お前それだとクマもライオンも一緒じゃねえか」
うるさいなぁ。実際、全部一緒じゃないか。
俺たち『撮影班』に舞い込んでくる依頼は、何もその全てが半魚人のような異精を討伐しろ、というようなものではない。中には物理的な弱点が存在しない——あるいは肉体そのものが存在しない、幽霊のような異精を排除しろという依頼もある。というかそんなものが大半だ。こういった連中は物理的な弱点が存在しない分、当然ながら討伐難易度も跳ね上がる。
そんな事情があるからこそ、ぶっちゃけクマもライオンも半魚人も、「物理的に明確な弱点がある」という意味で似たようなものなのだ。
「お前もそのうち分かるようになるよ、玉川クン」
「なるか！　というか『撮影班』としては俺の方が先輩だからな！」
疲れのせいか、普段よりも語気が強めな玉川。

美空さんは苦笑いしつつ片づけを手伝っていたが、ふとその手を止め、鋭い視線で階段の方を見つめ始めた。

――コツ、コツ、コツ――

数秒後、小気味のいい音を響かせながら、１人の男が上がってきた。短髪に眼鏡、紺の柄なしスーツに黒の革靴という、いかにも役人といった風貌だ。

彼は美空さんを見て少し驚いたような顔をした後、すぐに微笑を浮かべて話しかけてきた。

「こんばんは。『特異撮影』を……異精の討伐を依頼してもよろしいですか？」

「……」

その言葉を聞いた瞬間、俺は無意識に身構えていた。真横の玉川からも息を？む音が聞こえた。

――通常、特異撮影の依頼をしてくる人間は、異精のことを何も知らない素人ばかりだ。彼らは見たこともない化物の出現に戸惑い、しかし周囲の人間からは碌に信じてもらえず、ネットで様々な情報収集をした果てにゴッドシネマ白笹に辿り着く。うちの支配人がそのようなマーケティングをしているからだ。

しかし今、この男は化物を明確に『異精』と認識した上で、その討伐を依頼してきた。

素人の知ったかぶりとは思えない。そもそも異精という単語は、どれだけマニアック

な匿名掲示板であっても確認できない、業界人同士のやり取りでしか使用されない専門用語だからだ。

つまり、逆説的にこいつは業界人。

自ら異精に対処する能力があるにも関わらず、俺たちにその役を任せようとしている。

これは、とんでもない厄介案件かもしれないぞ……！

「かしこまりました。どのような内容でしょうか？」

俺や玉川が反応するよりも早く、美空さんがビジネススマイル全開で対応する。すると男の微笑に、わずかな申し訳なさが滲んだ。

「警戒させてしまって申し訳ありません。夜も遅いことですし、単刀直入にいきましょう」

「……公安の方ですね」

笑顔を引っ込めた美空さんが確信めいた様子で尋ねると、男は「流石です」と言って敬礼した。

「警察庁警備局異精課の桑乃亮（くわのりょう）です。この度は千貌（センボウ）の討伐依頼で参りました」

第２話　ハニートラップ

「なぁイオ、俺の代わりにこのＤＶＤ返してくんね？」

みなとみらいでの特異撮影の翌日。放課後の教室で、隣席の玉川が１枚のＤＶＤを差し出してきた。見たところかなり古い洋画で、図書室から持ち出したもののようだ。

「嫌だ。自分でやれ」

「お？　そんなこと言ってええのんか？　俺はお前のためにわざわざ提案してやってんねんぞ？」

聞くに堪えない似非関西弁で、いっそう深みが増したアホ面を晒す玉川。その不穏な様子に、俺は思わず身構えてしまう。

大抵の場合、こいつはドヤ顔を披露した直後にとんでもない馬鹿をやらかす。その結果こいつ１人が折檻されるだけならいざ知らず、何故か俺ばかりが尻拭いをする羽目になるのだ。

トラウマの数々がフラッシュバックした俺は、玉川を睨みつつゆっくりと後ずさった。

「……何を企んでる？」

「人聞きの悪いこと言うなって。忘れたのか？　今日は金曜だぜ」
「金曜日？　だから何が……あっ」
言わんとすることを察した途端、玉川はニヤニヤと底意地の悪い笑みを浮かべた。なんとなく腹が立ったので、差し出されたＤＶＤを無言で受け取り、そのまま奴が座っている椅子を一息で引き抜いてやる。
床に思いきり尻を打ちつけたアホが悶絶するのを尻目に、俺は図書室へ向かうことにした。普段は奴の頼みというだけで重い足取りも、今だけは軽やかだ。
だって金曜放課後の図書室では、彼女に会えるのだから。

横浜市立五列高等学校は、特にこれといった特徴がない高校だ。偏差値は中の上、運動部はたまにインターハイに出たり出なかったり。いわゆるブラック校則といったものがあるわけでもなく、教師・生徒双方が程よく学校生活を満喫している。
だが、そんな我が校にも１つ――いや１人だけ非凡な人物がいる。
「お、庵くんじゃないか。今日はどういったご用件かな？」
図書室の貸出カウンターで座っていた女性が、読んでいた文庫本を置いて微笑みかけてくる。ただそれだけの動作があまりにも画になっていて、俺は思わず見惚れてしまった。

――この人は二階堂奈津にかいどう　なつ。俺の１つ上の先輩で、図書委員会に所属している。美人で優しいのはもちろん、中性的な話し方がショートカットによく似合っていて、男女問わず憧れの的となっている。

「こんにちは二階堂先輩。今日はこれの返却をお願いします」

「ＤＶＤだね？　オッケー……あれ、返却期限が過ぎてるね。だめじゃないか、期限はちゃんと守らなきゃ」

「あっはは、すみません」

玉川ァ！　貴様のせいで先輩に注意されちゃっただろうが玉川ァ！

心中で未だ悶絶しているであろう相棒を呪っていると、業務用ＰＣを見ていた二階堂先輩が意外そうな顔をして言った。

「あ、でもこれ、借りたのは庵くんじゃないんだね」

「そうですね。クラスメイトの分です」

「じゃあ友達の代わりに返しに来てくれたのかい？　庵くんは優しいね」

ナイスだ玉川ァ！　今度ジュースを奢ってやろう玉川ァ！

「そんなことないですよ。たまたま図書室に用事があっただけなので」

「用事、用事ねぇ」

切れ長の目を細め、ジッとこちらを見つめてくる二階堂先輩。その吸い込まれるよう

な瞳を直視できず、思わず目を逸らしてしまう。
「あ、あの、先輩？　ど、どうかしましたか？」
そっぽを向いたままたじろいでいると、先輩は何かを思い出すようにして指を折り始めた。
「先週は個人的な調べもの。先々週は勉強」
「……」
「その前の週は涼みに来て、さらに前は友達の手伝いで来てくれたわけだけど……」
二階堂先輩はそこで言葉を区切った。そのままカウンターから出てきて、俺に近づいてくる。
そして正面で立ち止まり、いたずらっぽい笑みを浮かべて俺の顔を見上げてきた。
「今日はどんな用事で私に会いに来てくれたのかな？　白笹庵くん？」
「――」
――いや可愛すぎるやろがい!!
先輩目当てで来てたことがバレた恥ずかしさよりも感動の方が勝る。美人の上目遣いと笑顔はこうもＫＡＷＡＩＩを演出できるのか。あな恐ろしや二階堂先輩。貴女こそが日本の誉れあるＴＯＰ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＫＡＷＡＩＩだ。
そんなふうに錯乱していたせいか、俺は馬鹿正直に本音を零してしまった。

「先輩に会いたくて来ました……」
　目を逸らしたまま蚊のような声で呟くと、二階堂先輩は目を丸くした。そして小さく吹き出し、くっくと愉快そうに笑い始めた。
「嬉しいな。私も庵くんに会いたかったよ」
　マジで!?
「それはどういう意味ですか……？」
　精一杯平静を装って聞いてみると、二階堂先輩はポケットの中からスマホを取り出し、何やら検索し始めた。
「ここ最近オカルト板で面白い書き込みがあってね。庵くんだったら何か知ってるんじゃないかなって……あった！」
　そう言ってスマホを見せつけてくる。画面に映し出された文字列を見た瞬間、俺は先輩の意図を察した。
『横浜市内で半魚人出現か!?　目撃証言多数!!』
　約１週間前にそう銘打って投稿されたスレッドは、そこそこの数の書き込みで賑わっていた。横浜市内の海岸で半魚人を目撃したという証言を皮切りに、同様の化物を見たという書き込みで埋め尽くされている。つい昨日になって「これは映画撮影だった」と投稿されているが、そこはオカルト板。今度は県や政府の陰謀論が議論されているよう

だ。

うん、どう見ても昨日の特異撮影のことだな、これ。

何ならスレの初期の方で見知ったＩＤが質問してるし。ここで事件のことを知ったんだな、美空さん。

――さて。今日は俺からどんな情報を引き出そうとしているのだろうか、二階堂先輩は。

日頃から俺を監視しているこの人のことだ。半魚人が実在することも、その下手人が俺であることも知っているに違いない。何なら昨日だって、どこかの建物から特異撮影の現場を盗撮していたことだろう。

根拠は複数ある。

いつもどこかに録音機を仕込んでいること、俺のクラスに盗聴器が仕掛けられていること、俺が特異撮影をする度に探りを入れてくること、学校に知らされている先輩の住所が虚偽であること、初対面からやたらと好意を示してくること、常にスタンガンを隠し持っていること……いろいろだ。

これだけ怪しい点だらけなので、もちろん身辺調査はしている。ところが、ゴッドシネマ白笹のコネを総動員しているにも関わらず、未だに先輩の素性は特定できていない。現時点で判明していることといえば、『二階堂奈津は何かしらの組織の支援を受け、

白笹庵を監視する為に送り込まれた』ということくらいだ。つまり何も分かっていない。

故にこちらは何もできず、ただ先輩からの追究をのらりくらりと躱すしかないのだ。

「あー、例の半魚人のスレですね。これがどうかしましたか？」

たった今初めて見かけたが、さも既知であるかのように振る舞う。

そんな俺の反応が意外だったのだろう。二階堂先輩は少し驚いたような顔をしてから、俺に探るような目を向けてきた。

「庵くん、実はこの件に関係あるんじゃないのか？　先週ここで調べ物をしてた時は、珍しくオカルト関係の本なんかを漁ってたし……実は半魚人のことを調べてたんじゃないか？」

そら来た！

「調べてましたよ。ちょうどこのスレを見た直後だったんで」

「え？」

「スレを読んでるうちに『そういえば半魚人ってどんなだっけ』となりまして。だから図書室に寄って調べてたんです」

「つまり……キミ自身は事件とは無関係？」

「はい。見つけ出してコメントしてやろうとも思ったんですけど、まあ見つからなかっ

たです」

そう言って頬を掻くと、先輩は分かりやすく肩を落とした。

「な～んだ、私の勘違いだったのか……面白いことになったと思ったのに……」

「あはは、期待に沿えなくてすみません」

「いや、庵くんは何も悪くないさ。こちらこそ私の妄想につき合わせてしまってすまない」

トボトボとカウンターに戻っていく二階堂先輩。その様子に若干の罪悪感を覚える一方で、俺は腹の探り合いが終わったことに安堵していた。

さっき先輩に言ったことは、全部が全部真っ赤な嘘というわけではない。美空さんから今度の討伐対象を聞かされていた俺は、本当に半魚人について調べるために図書室を訪れていたのだ。役に立つような情報はほとんど得られなかったが、おかげでイメージを固めることだけはできた。

まあ、本当のところはそれすらもついでで、二階堂先輩に会いたかったというのが最大の理由なんだけどな。

――この人は間違いなく、どこかの組織から送り込まれたスパイだ。

探りを入れてくる理由は分からない。引き出した情報を何に利用するつもりかも分からない。

確かなことは、俺に向けている好意が偽りであることだけ。それを知って尚、リスクを承知で関わり続けるなんて馬鹿げている。分かりきったことだ。

それでも俺は、この人を好きになってしまった。

だから仕方ない。仕方ないんだ。

すっかり絆されてしまった愚かさを自覚しつつ、俺は先輩と共に過ごす時間を選ぶことにした。

「じゃあ俺は調べ物をしますね。古文の参考書ってありますか？」

「うん、あるよ！　場所は確か……」

パッと顔を輝かせて、再び席を立つ二階堂先輩。

前を歩いて先導してくれるおかげで、俺は先輩のとある変化に気づけなかった。

弾むような声の裏で、目を細めて怪しく微笑んでいたことに――。

第3話　罪と罰

空が茜色に染まる19時。二階堂先輩とのひと時を堪能した俺は、いつも通りゴッドシネマ白笹の階段を上っていた。別に今日が出勤日だからというわけではない。劇場の上階が支配人の住まいであり、かつ俺の現住所でもあるからだ。

つまり、俺と美空さんは同居している。

理由は単純で、俺たちが戸籍上は親子関係だからだ。ちなみに同居することを知った当時の白笹美空ガチ恋勢はキレ散らかしていたが、法的に認められているのだから何もおかしくはないだろう。今でもたまに本気の殺意をぶつけてくるのはどうにかして欲しいところだが。

受付がある2階にたどり着くと、そこには美空さんが座っていた。しかし今日は珍しく映画も見ずに、思い悩むようにして天井を見上げている。

「ただいま美空さん。どうかした？」

近づきながら問いかけると、美空さんは頭を振った。

「ううん、何でもないよ。おかえり庵くん。学校はどうだった？」

そう言って微笑むが、話し方や表情に疲れが滲んでいる。何かあったのは間違いない

だろう。

心当たりがあるとすれば――

「桑乃さんの件？」

昨晩劇場を訪れ、公安の人間であることを明かした依頼人。その依頼内容についてではないかと尋ねてみると、美空さんはゆっくりとため息をついた。

「正解。庵くんは何でもお見通しだね」

「他に思いつかなかっただけだよ。あの人が帰ってからずっと何か調べてたみたいだし……どうせ裏では厄介なことになってるんだろ」

「あっはは、まあね」

力なく笑いつつ、手元の半券に目をやる美空さん。今日の入場者は３人だったようだ。この調子だと、相変わらず劇場の売上は大赤字だろうな。

特異撮影が無ければ。

「……断ったら？　今月は半魚人で稼いだし、あと１、２回別の依頼で稼げば大丈夫だって」

説得しつつバックヤードに入り、給湯室の棚を漁る。俺がマグカップにインスタントコーヒーを淹れている間、美空さんはずっと押し黙っていた。

――悩むのも仕方ない。ゴッドシネマ白笹の売上はほとんどが特異撮影であり、月の

ノルマは平均2、3件といったところだ。
ところがあの桑乃という男が提示してきた報酬は、それだけで半年食っていけるような大金だった。依頼内容もたった1体の異精を討伐するだけなので、非常においしい話だ。これを逃すのはもったいない……もったいないが、その分危険度も跳ね上がる。
討伐対象である千貌（センボウ）という異精は、今までより遥かに強力みたいだし、何より公安からの依頼だ。面倒な事情が絡んでいるのは容易に予想できる。
絶対に断った方がいい。美空さんに余計なストレスをかけたくないしな。
砂糖とミルクを入れ、仕上げにティースプーンでかき混ぜる。そうして完成したものを手渡すと、美空さんは揺れるベージュの水面をじっと見つめた。そのまま数秒が経過し、彼女はどこか吹っ切れたような顔で俺を見上げてくる。
「庵くん、私決めた」
「うん」
「危ない依頼だし、公安以外にも面倒な組織が関わってるの。だから……」
「うん」
「だからこの依頼、受けるね！」
「うん……うん？」
そこは断る流れでは？

先ほどまでの悩みようが嘘みたいに意気込む美空さんは、満杯だったコーヒーを一気に飲み干してしまった。そして勢いよく立ち上がり、

「あ〝っ〝い〝!!」

悶絶しだした。猫舌のくせに何してんだこの人……。

お冷を手渡しつつ「何で受けるの？」と聞いてみると、今度はそれも一気飲みした。お腹壊すよ？

「ぷはーっ！　今回の依頼なんだけど、どうも八鹿家（やつしかけ）の残党が関わってるみたいなんだよね。庵くんを巻き込みたくなくて躊躇ってたんだけど、いい機会だし逆に利用しちゃおう！」

そう言って拳を掲げる美空さん。対して俺は、マグカップとコップを片付けながら先ほどの台詞を反芻していた。

――八鹿家とは、かつて異精を用いた暗殺を生業にしていた暗殺集団のことだ。

その特性上、一般人には全く知られていないが、こちらの業界では政府中枢から裏社会にまで巣食う異精犯罪組織として有名だったらしい。

で、何故そんなヤバい連中が「暗殺を生業にしていた」のかというと、つい最近になって壊滅したからだ。

数年前、政府主導で八鹿家の殲滅作戦が密かに決行された。双方に多数の死傷者を出

すも作戦は成功し、大昔から根付いていた巨悪は完全に打倒された――なんて都合のいい話があるはずもなく、今度は他の犯罪組織間でシマ争いが激化した。おまけに八鹿家の残党が様々な組織に身を寄せることで、日本中の異精犯罪組織が勢いづくことになってしまったのだ。世はまさに、大異精犯罪時代!!

桑乃（こうあん）がわざわざうちに依頼してきた理由も明白だ。連中は美空さんの罪悪感に訴えかけて、自分たちの尻拭いをさせようとしているに違いない。

何故ならこの人は――八鹿家殲滅作戦の実働部隊だったのだから。

「あいつら、また美空さんを利用する気だよ。何かあったら全部美空さんのせいにして、自分たちは知らん顔するつもりだ」

「うん、分かってる。それでも……私が無関係ってわけじゃないからさ」

ほらこれだ。

この人は、優しすぎる。

殲滅作戦に参加した時もそうだった。元は政府と無関係だったのに、公安に拝み倒されて仕方なく連中の一員になり、作戦当日は他の追随を許さないほどの首級を挙げ、挙句その後の顛末の責任を押しつけられて公安を去った美空さん。

当時だって都合よく利用されていると理解していたのに、「困っている人は助けなければいけない」という義務感から、手を差し伸べた美空さん。

今回も同じ悲劇を繰り返すかもしれないと理解していながら、また手を差し伸べようとする美空さん。

――誰よりも優しくて、誰よりも頑固なこの人のことだ。これ以上説得したところで、その決意は揺らがないだろう。

だったらせめて、俺はこの人の支えになろう。

ひとりぼっちにならないように。硝子のように透明で純粋なこの人の心が、音を立てて崩れないように。

「……分かった。俺はどうすればいい？」

万感の思いを込めて問いかけると、美空さんはあっけらかんとした態度で言い放った。

「ありがと！　じゃあ今から外国人墓地に行ってくれる？　そこで千貌（センボウ）が現れるみたいだから倒してくれるかな」

いや切り替え早いな！

つうかあんたが行くわけじゃないんかい!!

第４話　墓地と千貌と大鎌と

ゴッドシネマ白笹から少し離れた関内駅まで徒歩で移動し、京急根岸線に乗り込んでから石川町駅で降りる。商店街を抜けて坂道を登ると、１０分ほどで横浜外国人墓地だ。

昨夜と同じくジーンズにＴシャツ、劇場の腕章という代わり映えしない格好で墓地外周を歩いていた俺は、人目がつかない場所でこっそりと敷地内に忍び込んだ。開館時間が過ぎているから仕方ないとはいえ、かなり罰当たりなことをしてないか俺？

あの後、俺は美空さんお手製の激辛カレーをかきこみつつ、討伐対象の特徴と今回の作戦について聞かされた。

まずは依頼人の桑乃によってもたらされた情報だ。千貌（センボウ）と呼称されるその異精は全長１５ｍほどの巨体で、芋虫のような外見らしい。

ただしその足はムカデのような節足で、全身に泣き叫ぶような人間の顔が浮かび上がっているとのことだ。公安が以前討伐隊を送り込んだ際、生存者の目の前で犠牲になった隊員の顔が浮かび上がってきたことから、それらは全て食い殺された犠牲者だと推測されているらしい。

『千の貌』なんて命名されるくらいだ。犠牲者の数は……想像もしたくないな。

ここで気になるのは、千貌があまりに強すぎることだ。

異精絡みの事件が発生した際、公安は異精の特徴や土地柄に合わせ、業務委託という形で人を集め討伐隊を結成する。白笹美空というニュータイプのせいで勘違いしがちだが、彼らだって数々の修羅場をくぐり抜けてきた実力者。決して弱いわけではないのだ。

それなのに、これまで数度に渡って決行された討伐作戦は全て失敗。一般人は当然ながら、隊員にも少なくない数の犠牲者が出ている。

状況から鑑みるに、千貌は未知の特殊能力を持っている可能性が高い。現時点で報告されている「巨体に見合わない素早さ」「体組織を一瞬で崩壊させる猛毒」「地面に潜航しての不意打ち」といった特徴だけでなく、意表をつくような方法で人を襲い、そして逃げおおせているのだろう。

――幸い、そのカラクリの見当はついている。

『庵くん、聞こえる？　準備できた？』

左耳にはめたインカムから美空さんの声がする。俺は声を出さず、プレスボタンを短く1回だけ押した。これであちらには短いノイズが聞こえたはずだ。

『大丈夫みたいだね。じゃあ手はず通り、千貌は私1人で倒すから、庵くんは飼い主を探

して。念の為にもう一度言うけど、危なそうなら迷わず逃げること。いい？』

心配そうな呼びかけにも、先ほどと同じようにボタンを短く押し返す。俺は手によく馴染むカランビットナイフを構え、なるべく音を立てずに敷地内を歩き始めた。

――作戦内容は至ってシンプル。

美空さんが囮となり、単独で千貌を撃破。その飼い主を俺が探し出し、拘束して公安に引き渡す。以上だ。

一晩の調査の結果、今回の事件が八鹿（やつしか）家絡みだと確信した美空さんは、八鹿家の残党が千貌を操っているのではないかと仮定した。討伐隊員はかつてないほど強力な異精に気を取られ、姿を隠した飼い主によって不意を突かれた可能性が高いと考えたのだ。確かにそれなら歴戦の討伐隊員たちが犠牲になったことや、わざわざ美空さんに依頼してきたことへの説明がつく。

桑乃が八鹿家残党の関与を伏せているのも、公安の不始末のせいで連中が生き残っていることを明言したくないからに違いない。わざわざそんなことを言わなくても、美空さんなら自力で気づいて勝手に手を貸してくれるだろうという魂胆も透けて見える。本当に腹が立つ連中だ。

わずかな情報を基にここまで推理した上で、美空さんは自分1人で千貌を倒すと言った。

激辛カレーに舌鼓を打ちながら、明日の夕飯を決めるような気楽さで。
未確認の下手人がいる（可能性が高い）とはいえ、千貌はこの業界の手練が何度束になっても勝てなかった異精だ。そんな奴に単独で挑むなんて、間違いなく自殺行為だろう。
だが、白笹美空は別だ。
美空さんならどんなに強力で醜悪な異精が相手でも、またたく間に殲滅してしまう。
何故ならこの人は、『最強』という陳腐な言葉の体現者なのだから。
（むしろ危ないのは俺の方だな）
周囲を隈なく見渡しながら、自信の役割を整理する。
俺は美空さんが千貌の相手をしている内に、この墓地のどこかにいるはずの飼い主を探し出し、拘束しなければならない。
口にするのは簡単だが、こちらは飼い主についての情報を何も知らない。その性別も、見た目も、実力も。
もしも飼い主が実在するなら――美空さんの推測なので確実にいるのだろうが――その道のプロを何人も屠る化物を操るくらいだ。その実力は折り紙付きだろう。
少しでも厄介そうなら、さっさと美空さんと合流しよう。
そう決意した時、俺の頭上が天蓋に閉ざされた。

いや、正確には俺の頭上だけでなく『外国人墓地の上空全体が』だ。
約18，000平米――半径100mを催眠下に置く玉川には及ばないが、美空さんはこの範囲内で発生する事象を外部から観測不可能にできる。
人であってもカメラであっても、普段通りの外国人墓地しか見えないのだ。
美空さんがこれを発動したということは――
【ギィイイイィィイイイイイイイィィイイイイイイイ!!】
金属が擦れるような、それでいて生物的な音が木霊する。
次の瞬間、俺の約50m先に、立ち並ぶ木々よりも遥かに巨大な芋虫が現れた。
その肉体は皮を剥いだ生物のように赤黒い筋繊維が剥き出しになっていて、よく見ると無数の人間の顔で覆われている。間違いなく、あれが千貌だ。
『やっば!! こいつマジでキモいよ俺くん!!』
そう言う割には楽しそうですね美空さん。
それほど遠くない位置で異精と人間最強の戦闘が始まったことを正しく認識しつつ、俺は思考を巡らせる。
俺が奴の飼い主なら、美空さんと千貌の戦闘をほったらかしにはしない。
せっかく育て上げた手駒を守るため、美空さんの一挙手一投足を視認できる位置に陣取るだろう。そして今回、美空さんは敢えて、周囲に木々が鬱蒼と生い茂る位置で千貌

を待ち伏せした。
　木々や建造物に邪魔されず正確に戦況を把握し、かつ姿を潜められる場所はかなり限られる――！
　そうしてあらかじめアタリをつけていた潜伏候補地をいくつか確認してみると……
（いた……！）
　美空さんたちから１０数ｍほど離れた林の中。気配を殺した俺の約５ｍ先で、熱帯夜であるにも関わらず、真っ黒なローブに身を包んだ不審者が。
　性別は……分からない。フードを被った後ろ姿であることに加え、男でも女でもおかしくない線の細さだ。どうにかしてあのローブを剥ぎ取らなくては。
　音を立てず、かつ出来るだけ早く謎の人物の背後に忍び寄ろうとした――その瞬間。
（――!?）
　不審者の背後から黒髪ショートカットの女が音もなく現れ、右手に握った大鎌をフードの首筋に当てた。
「――ッ！」
　その直後、俺はわざと音が出るようにして大地を蹴り、一息に女との距離を詰めてカランビットを振るった。
　ギィン！　という金属同士の鈍い衝突音が響く。女は俺に背を向けたまま、大鎌の長

い柄でカランビットを受け止めていた。
　前を見据えていた女がわずかに振り向き、ショートカットの向こうの横顔が見えた途端、俺は思わず声を荒げた。
「何やってるんですか、二階堂先輩……！」
「――こんばんは、庵くん」